ヤングこだま

吉賀高

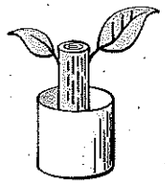
小・中・高校生から専門学校、大学生まで、若い人たちの意見を特集するコーナー「ヤングこだま」です。今回は島根県立吉賀高校3年生の皆さんです。学校、学級単位での投稿を募っています。投稿希望の学校は「ヤングこだま」係・電話0852（32）3305までご連絡ください。

新たな見識得て地域に貢献

3年　谷元　美月

四季折々に表情を見せる山、そこから注ぐ澄んだ川、そして、その水で育まれた稲の波。これらは私の家から見える、私が最も愛する景色だ。でも、30年後、50年後にもこの故郷の美しい景色を見ることができるのだろうか。

高校3年生になり、目先の進路だけでなく、自分の人生についても考えるようになった。その中で、私が今暮らす町の未来についても深く考えるようになった。進学を希望する私は今春、生まれ育った吉賀町を出て行く。将来的にはいつか吉賀町に戻りたいと考えているが、その時町はどうなっているのだろうか。



私が住む集落で現在未成年者は私だけだ。あと30年もすれば集落は空き家だらけになり、田畑も荒れ放題になってしまうだろう。やがて集落、町は消えていくかもしれない。そうして、私の大好きな景色が失われていくことは本当に悲しい。

私はこれから得ていく新たな知識と経験を、地域貢献の糧としていきたい。進学が待ち受ける今年は、その第一歩となる年にしていきたい。

投票率上昇へ地域学習推進

3年　秦　晃基

若者の選挙での投票率が年々下がってきています。それは政治への関心のなさや、自分が投票してもしなくても政治は変わらない、という、選挙への諦めから起こっているのではないかと思います。

どうすれば投票率は上がるのか。私は地域学習をもっと推進することが、投票率の上昇につながると考えました。

私の学校では地域学習にとても力を入れており、地域とのつながりも強く、さまざまな地域での活動を行うことができました。その結果、私自身も地域や社会のことに関心を持つようになりました。実際に、選挙権を持った同級生たちはほとんどが選挙に行っていました。これは積極的な地域学習のおかげだと思います。

地域を見つめ直すことで課題が見つかり、そのために自分に何ができるかを見つける。それが選挙への第一歩だと思います。それを考えて投票した一票は、意味のある大きな一票だと思います。だから、私はもっと地域学習を全国で積極的に行ってほしいです。

若のひろば

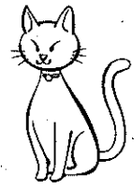
「新年の願い」（高校生版）

何事も恐れず積極的に挑戦

3年　石川　希帆

私の今年の目標は、何事にも積極的に取り組める人になることだ。

今春から家族と離れ、一人で大学生活を送ることになる。とても不安で、今まで当たり前のように毎日一緒にいた家族と離れるのはとてもさみしいことである。



毎日笑顔の絶えない家にいられることが、私にとって一番幸せなことである。その日々があっという間に変わり、静かな家の中でたった一人だと、やらなければならないことも誰にも言われないから、自分で何もやらなければならない。

大学に入ったら、勉強に取り組みながら、私は地域のためのボランティア活動に参加したいと思っている。今の私は人に勧められなければ何もできない。また、誰か知っている友人が一緒にいなければ何もできない。

そんな自分を変えられる一年にしたいと思い、今まで行くことができなかったボランティア活動に参加したい。何事にも怖がらず、積極的に挑戦していきたい。今までの自分とは変わった姿を家族に見せたい。

保育士になり地元助けたい

3年　河村　咲羽

私は今春から地元を離れ、県外の短期大学に通います。将来は保育士になろうと思っているので、保育の知識をしっかりと学んでいきたいと考えています。

短大では高校の時より履修科目も増えるので、授業量も多くなって、大変になってくると思います。だから、毎日しっかりと勉学に励んで、楽しい学校生活を過ごしたいです。

また、学内には私と同じ志を持っている人がたくさんいると思います。その人たちと一緒にたくさんのことに挑戦し、お互いが成長することができる学校生活を送りたいです。

そして、将来は地元の保育所に就職したいと思っています。私の地元は今、保育士の数が少なくて困っています。今まではいつも地元の人からいろいろな場面で助けていただいてきました。だから、今度は私が地元を助けていきたいです。今年は短大生活の中で特に勉学を頑張っていきたいです。

私の作品

短歌

◇蓮華の会（大田市）

散歩する空気ひんやり心地良し　吾に寄り添う君は足元　岩谷真由美

三月の桃色の風舞い踊る出会と別れ花びらにのせ　山根由美子

彼岸の日姉と歩いたこの径を今日は一人で落椿踏む　森脇　知子

テレビ漬け認知症防止にと思い立ち千羽鶴折る夢叶うべし　巳作　洋子

ホロ酔で芝に寝ころび仰ぎ見る空は明るく十六夜の月　平塚　澄子

小雨降る砂浜に舞う二四の蝶はるかな海より吹く風に乗り　岡田　稔子

秋めきてすず虫鳴ける朝方に何を思うか時計コチコチ　コチ

俳句

◇あすなろ句会（大田市）

新薬の効き目の確かさ爽やかに　花田　時子

小春日や即位のパレード旗の波　今田　文子

庭の隅吹き寄せられし散紅葉　岩田　律枝

寺の庭白く咲きたる帰り花　横田美恵子

秋祭り神輿の担い手ちどり足　槿原　敏子

一つ知り三つ忘れて木の葉髪　柿丸　寿枝

◇水無月句会（浜田市）

冬めくる日本海の浪高し　村上　義正

愛妻に残せしごとく野菊咲く　森川　静江

跳ね上がり輪をかくやうにボラの群　長沢　佳子

母ありし日の縁側に小春の日　増野　香代子

大学の桜紅葉の好きな道　森田　玲子

◇雲城公民館俳句教室（浜田市）

母国食弱あ山山杖く顔

女子ログ

草

中学生

海外の料

受けた。

ムーディ

生み出さ

知の食材で埋め尽くされ

が全く想像できない褐色

をしているエキゾチック

は、エプロンを着けず、

しく見える薄手のセータ

当時「豊満」という言葉

私は「太っているのに美

心した。

「あんまり非人情

「なにこれが非

よ。しかし厭なら

「なに私は大丈夫

「わたしは、あ

す。――それから

ずかしくなって来

いや読みにくい」

「読みにくければ

「ええ、いい加減

この一夜と女が

く。一と限るはつ

こそという」

きょうの歴史

▽1965年

日本人の教育目標

終答申。「正しい

敬愛の念に通じる